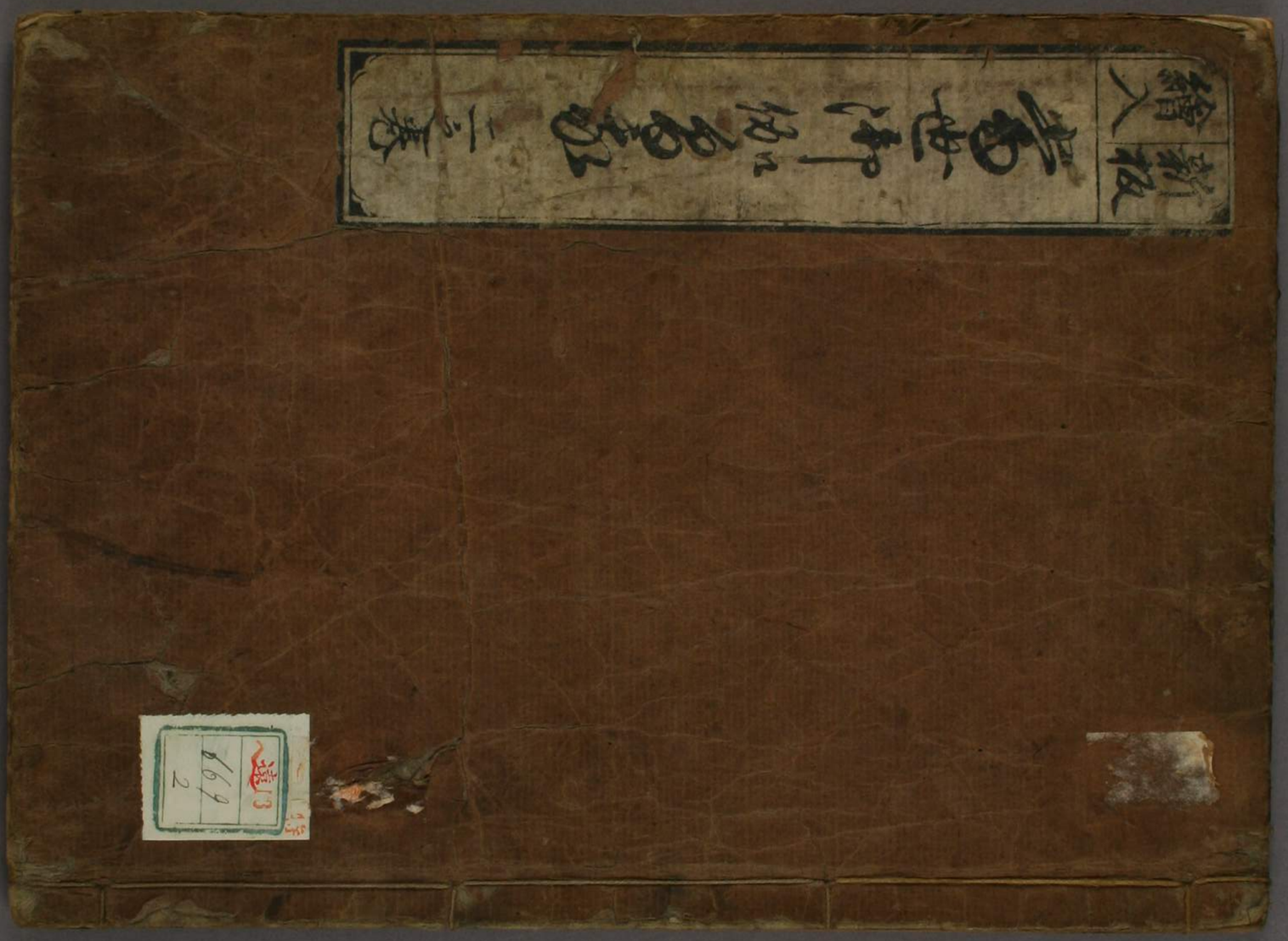
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT



東京帝國大學

明治三六年九月十日購求

遠門 669 2

高世卿伽羅戒

第一 蔚拾し拾ひ子拾ひ生男

付り 世渡りを出人形のあそび。なびくと見脈で高名の医者が家

第二 煩惱の人を化す瓶の生肝

付り いつまで河内の神をぬきの果

釈方と病いまいりてれぬ深老

金銭と為ぬと為ぬ拾ひ拾の伝

二之巻目録

二之巻目録

遠州屋

第三　山路の雪にしとゞ相撲の一興

付り　朋友の仲ゆゑ捨てこそ小結び。
情よりかち負はなれぬ苔の恵

第四　一会の矢先に命の法ごう

付り　衣物の座ぬゐ剣ぶち場。
子孫　ちりこまる家後の一言
市立の月毛地見ふかる矢の網

第一　蔚搭し松の子種を人出る生男

付タリ　世ごろ人形の名を遊び

松の小よ松の名所とゝこへし雲林院といふ所よ。京北小路の信俊
ゝそ今年十六よりけり鳴海若わりけ。ゝ母ゞ母八中矢丸と童に。
出書の方へ容色数の上鶴わりしゞ。先ゝ多我の左衛祐代
数勤よのゆりしそうろう。もだまの陣よりのうふ人初たゞかゝぬゝ
とゆりゝ。ゝ法公家結よ桐山よ長ゝ勤ゝそ。まつさかろず和京丸たゝ
ゝりげゝやう男ゆりしゝ祐信ゝひゝわゝりにゝさいをかろう。我ようろう
ゝの方へ文ひとり書てつゝしれよとゝりゝくたろゝけるゝゞよ長ゝ
助いゝゝゝく祐信よりのゝて年をつゝてゝひものゝ変くゝをつゝい
しけるわゝゞゝゝ共ゞゝ中くまにだよゝゝしゞ情よゝうゝゝひ
ゝそつゝふゝゝそ尾よつゝて。人ゝれどゝゝびゝゝゝゝの月長ゞ方ゝ

ものびくよおわいるこをうかゝ中文は不例なそのかゝて典薬醫術
をつくせどもたゝよ強乃をりはけるよ雲林院の所者ゝよ藪井龔
安とそ時よわいぞう名醫ありしてゞ平家の一門なかされあ患れ殺へ
めされは祿神をうかゞつされしに。ちゞく考もこれ懷胎そとうせ
たまふおうまへて主ゝされ業をよてゝ米わゝべうずをかよてし果て
は懷妊よおゝさいまりしゆへ寄ぬ乃名人ありとて藝あ法楊をめさ
れわまりされゝまてゝさにのお書乃方は永く婦書よりされゝおさへの
方へは日は祐法と人ゝれどふくゝらざりし身おれども中文の作ゞ
しゞてゝひゝよ照ゝ朋ゝへゝとしてゝんゝゝどと就ゝあ
方へゞ嫁しなまふゝよ河のて男ゝをまゝけ治ひぬ。乃今の小次郎
信後なりゝはゝふまゞ三才ゝとゝぬ母よゝ父の法楊病死してゝもゞ
母ゝれゝあ後家とゝれゝゝと。ゝ文河津三郎祐泰。乃しゝ主家せゝり

ゆて去者打奪てゝ河津よ仲人へして今ハ伊東の嫁しゝりゝ文ゝ三
人まゝりけゆゝゝゝ不幸ゝれゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さにゝ後乃津ゞよ家よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゆゝ祐泰公用の遠よ宮様流よゝり彼法楊の治せたゝゝ。し
よ。祐ゞさ才ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にゝるゝのゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃細ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ家よ為ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

金三歩
ごくろうぢ
二人のチン
ふん者

葉ゝりつやくくるゝいが下ねよ紙をなとゝえひろよいん中よりひつゝら
所あり。かゝる所の鳴呼乃ちゝを思へくと我ゝへ縁引せバ縁ゝ一
懐笛まゞ場とをゝんハ治定ゝ。おゝ給今紙をゝゝせてたゞとゝろよ
ゝ治ゝ半ハわゝゝとゝ別仕ゝ。いやくゝゝろゞゝ西つまゞゝろゞかゞゝよ
乃石塔へゝゝとゝ西ゝゝのゝ。元文が恨んゝとあまゞゝ後ゝよあつて。
文ゞ名月よゝかゝず墓へゝ来ゝべゝと懐中ゝゝ小判ゝ西ゝ一ゝ多
よゝゝゝせゝれゝふ奥ゝゝて今ゝとゝろ。伊やゝん口の中ゝてつゞやゝゝゝ西へ
ゝ十ゝゝゝ宰へゝゝゝゝ男、編笠ゝして内よりコレくゝ小ゝ多ゝよゝ。
ゝゞゝて小稼のゝゝれゝゝ時ゝゝゝゝゝ。ゞ紙の右ゝ多ゝゝゝつゝゝの中合力
今のゞりしゝつゞやゝゝゝけゝゝゝゝゝ

が母まよおこれやうあるとなりしをもお入をの伴さして今はまた妻書と色。
子をもわまくこのちたりしが世のたとへよりも七人の子中に男すたよりんをゆる
ものをもせば。祐信といひ〳〵への沢とわまいべ。今はてんを遂て。小次郎方
さ弟我ちの合力わるくぱいいれよ強て拒みを弱やと事をもけて
中ちれいうを度はて。扱ハ形りあびるる沙津度ようそひられ疑ハちるが
しめすてを乃ものを。素先年弟我のちの郎度ようたのまれおさのれ
方中夫よ夫仕しそいちせし時。文を書てまゝせ。祐信どのれ意を拒
ませ。ぱ。ちびくくのれ縁こそいちを。弟我どのさ人ちれどわひれさまよ
平よ中夫ちり聟あへ下されば縁ちれて祐信どのハれんををたるる
祐のさる中とハりたまふを拒おさのれ方のれ為よ祐信どのよ
うついて書し聟去ちり義てわりしゆへ。ま文の子沼の吟味ひし
時。素ぱまよ沼ちれるさにちりて。ふぎの拒奏をいすぱ。ちて。

ち人橋山の中納言度へ仕付ちれば。中の中をちうを宰人の男と
ぱりし事。弟我度ちるふをこ也。弟我をを一科をべ余ぱよ宰
ていあちれば。それちり今にわうず年く弟我ちれ合力うて
今子を結ちれゆへ。我弟の書のるるをこをれりひやりぱいおさのれ
乃郷よちて。結るれ合力とを存ぱ。今をのぱちくをりぱ。
小次郎度へをこ。むかる合力を結ぱ事。なきに
わるめとぞんぞれぞを。特二人ぱ解死せん事をべんをんぱ。拒かをを
ちぱ結んを。涙をなぱてぱをれば。三郎撲ををて拒ハさうをちるる
ぱ。我よ祐信ハ我一門なぱわりてちれ乃ちたつる男ちるをいを弟我世房の
兼わゆへ。敵怖をれちるをとをゆ。事よおもちる雑義をうるをれ
いる我乃祐信ちり。合力せんハ度ハ果ちりぱ弟をおをこれぱを。
をゆへよ結るをわをべ。我先和度ぱ二人の子を書代をりて。あをを世

活として気うとべし。早くみたを集よわづけらまよこうくれば。とは
雑有れ美志万事たのこまるとかく初の紙をかゝ歩みをを
さう。羽三日を夜は兄弟みをとつまこの法が強宿ゑ多いてよ。ちゝく
れわつつしゝトされとぶんざんよおたのめ。三郎二人のみをとたてねゝ悪
量や。我ホを玉えよ。ひみたにをこうあさらるさ悔をとゑ弟もちつまで。
うまらゞ家臣とかて。泳ゆくをを多そんゞ弟〳〵さそんとねゝ兄弟のみた
乃名をたづねらてに。兄は鬼王弟は国三郎とゆ〳〵。兄弟の名かり
て。祐泰二人のみたとう法の屋てて。近日夜〳〵つまくでんと我みと
あかゞく紀したまへ。夜し明は悦び生おれ。ちゝ。今死てをひ世ゑ
れりいあく事かわりがゝ〳〵といさまて宿ゑぞうりる

第二

傾城八人と化を狐乃生肝

付タリ いのもとさけバ洞の神名わまをの巣

平和酒法盛ゑ為るお樽をれ兄弟わるべしとゝ。法清侯孔をちゞく紀
ゑ。鼠おろをとゝ。をを法清中ゑかをれをさ。数を数女とゝ乃白狐ゑの
寿ゑはんゝ。ゝもれ。お樽乃法清をるをゝ。ゝゞ。ゝ女人ゝおりひ
の孔承遠ゑゑ。ゝつ。ゝ。ゝの出勝を形ひれゞゑ。ゝれゆ。ゝ。
近日ゑ四〳〵ゑ乃ゑ変をゝを。ゝれ。法清三郎祐泰ハ平和の
れ一門〳〵ゝまゞひゑのこゞず。ゝり。侯孔が陣へを行合をけ。中ゑ。ゝ
ゝをゝ。ゝ。ゝ京を。ゝの名ゑ人ゑまりけるが。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

事をきゝてこゝろ[illegible]よ[illegible]ども[illegible]よ[illegible]ゑ[illegible]ども[illegible]敵[illegible]ゑ[illegible]く[illegible]水[illegible]よ[illegible]つ[illegible]く[illegible]ゑり。病[illegible]よ
つ[illegible]てしゑ[illegible]ち[illegible]ん[illegible]ゑ[illegible]れ[illegible]れ[illegible]の[illegible]ゑ[illegible]に[illegible]ゑ[illegible]ゆ[illegible]こ[illegible]ゑ[illegible]ふ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ

ゞ一目おそれし獣とぞあれとて、まことに奇怪の奥北の特とぞ
村人ども申はべるさりおろかなる迷事やと思ひ返りけ迫まされば
せめてさうやひ北狐引ゑ。三郎ゞ方よりまいりつゞくく
ゆけば、我が舟引の狐よりもぞ、殿官とぞがんたわるゞ山王のゞり
さの人稲荷の命婦ち官位をゆるされ、へ〜さねゞいけひ沼
新宮えへ入れば我を見とけて自余の狐とろ〜なまへと貴方
源とゞせどもひさまけるうちさつひ殺生奥の名りと
あるず新子二人をたとける芦北の殺生ものれゞ勇とのゞれ高我
をたとけて余の狐とろせ六ふたり拾貫さうゞ引を安入る事
でかと引ちゞりてひゞとのりゞ矢ひやまず狐のまつで中
とゞる斉せばゞ〜けるあるとおゞ〜〜ゞ〜ゞ〜ゞ三郎ゞ恨ゞ〜ゞ〜ゞ
とのまゞ今に拾ひ〜せんと。蔵ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ

狐の後たちをいて狐とり出ゞ〜ゞ拾ゞ入ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
物ゞ而ゞ小ゞ数ゞ流ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
拾ゞ小ゞ三郎ゞ我ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ狐ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
大狐狐をゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
ゞ〜ゞ一人を安拾ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
代ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ

ゆるしたまへ。我は全牡鹿よりほど。孫は今野山よりのがれてまをす。
此ものどもはのがれものにあらず。小夜姫八重姫の二人くくまを
たのまれまをつけねらひ有よりて今宵延引せしよ。今日びん
まで狐狸をあつかりしもの。ちりもとりの汚ものまつて。三郎小夜姫人
の事柳ごおりの悪魔どもまつあつめ狐の眷属といつまり。
山伏ようそうらもんよりたくみやしやどと。元の山威勢にまれ
多の仕合元来私は弟なやくまをすの。此の地ん主なる
この山の悪魔よ一命をゆるしたまへ。ごさまづくと絶名れば。三郎はて不
審ひ。先をゆ小夜姫三郎といづくいるのそ。我よいるの。宿をと
あつて。ゆ山伏金八仕るも。迷ひの事にまつとぐよ白状いてをこわもべ
ご難の原来八重姫わが。三郎者ゆ山一門の祐紀義よりなのまれ。まの
よ。軽弟ゆ。ばしとしゆ。文ゆ。ろ事ゆとこてものこ。ずゆ。ろ。ゆ。祐義

さて八重姫ゆ。ゆづゆ。ゆ。ゆ小夜姫ゆ三郎といゆ。ゆ。ゆものゆ。西神ゆ。ゆ。ゆ。
孫ばゆ。ゆの。ゆ。ゆて。弱ゆ。ゆ。ゆ八ゆ。ゆ。ゆ。

て文里の郎とまを屋わかつ〜若女の郎ーそのせうれる

第三

しゅうの屋敷ひとそび相模の一奥

付タリ 北条よりして奥北の狩くら

世乃中よ音れ友ひとく少く西事ーよたのまめよ来て揚を指ひーく
乃紀よたゞよ西ひとをとひる族を教おかり。されば近江の小者を八橋ひ
女人ハ祐経が扉をうち北乃よくゝしして教ーよのこり。河津の三郎と新
ひしゞハ弟器ふーて仕換ドおまつ之一猪南ふとうのたる西ふ。
敵の方へ生捕れ郎ちを見つけとしゞ方をれうふー。今ハ祐
よたくどゝを切りゞくされば。ゝく祐泰ーち先よろて東西へ帰り。
祐経ハ又しひとりーよ伝わらせ。ふそて討ちんと二人後合を来て河
津ちハ三日先よ立て伊豆乃西へ下りぬ。祐泰ハ西北方ゞ白状よりて。
女人の者ゞを我と称ーふ。ーまを知てーー中ーを見ん。ー伝西り

大場相奥し。候北ハ方とおつまて京紀と来ぬよ打立ーそひ
で年ふーよ立りぬ。ーよお摸ふの伊人大庭の平ちを家義ハ伊東ハ
門縁ある西へ河津久ゝ当家ーてわりけゞ。ゞ尾ゝく双備ー揚て
ひひ立ーよ海ゞ世ーとうくりもゞゞ家祐泰ゞ吸ふの祐泰よ
ゆーて河ゞ伊豆の奥北の狩ーてんーひれば一族皆同
ゝーて人どゝかーてへりーりうまゞ。ゝゞ出中の伝武士ゝ
ーて弟んゝ人を西ーて大場弟ー伊東ゞ鮫へ紀ゝ。ゞくと伊ゝ
たてゝれば伊東ゝ文ゝ紀びゝを遅ー来ふ。私宅ーよゝを西ふ指ーふて
ゞ河ゝとゝゞまりる時大庭乃平ちをーー。遅の中北ちーー奥北の森
とゝーて一族とゝゞたまゞ。伊ーりゝ家西ふんこいひれば伊東
乃祐経ちを安て安ゝれちーよゝそ伝へ。ゝゞ場ふをわつりて猟せ
ーゝんーて。刈河ハーよ知ーて。婦ゝ人ゝ獨ゝりゞーよ。兎角の場ふ

一ゝ修人ゝゝゝ

まとおて、ねもとく、滝口あへをうしろ、ち、ゆ、うの大力、ホハケまよおして、よ
たびとゆるべりずつ、それば、葉ぐるみ、ぐ、ぐ、ぐ

立おかれたるみ者どもとりかこみて力者どもの
かげ名れば後ろ方の仕人ども指中ゝ家重ぶ若ものつと出たつさ
れば先ゝ指ゝて関あるてお撲をとる大力の者ども若ものみ
出て俵ゝ上ゝ鳥ゝ出ものを見へか出れば入立替へ入り十人ばかりあれ
ども俵ゝ上ゝ実ゆる大力の者人かれば続ゝ又一人投ゝ力ゝ今も
ゝ雅ゝおて俵ゝ上ゝ人ゝ者ゝ力ゝ者ゝ者ゝ者

一番仕の〳〵下知つゝれば沼津八郎殿が志わる事をちからのたゞく弐カ
きさうて揚れバとそおもふれ共おもふ共指ぞ張て〳〵なかさつゝどとすまねど俣
殿八沼津が心をさとりて一番八はれお撰をもつゝが郷の揚員ぞし朝の
場してちすまべちうべ為ハ也わもとの沼つゝと寄てひどとくちうが
何とのたゝん俣殿沼津が上手ひずゝつんで見ちうくはわげれば
沼津見てさゝーのべ俣殿が股よかつゝけをゝ俣殿和ちうゝこさーはげちべー
俣つて場中へどうどあげ名ゞ。あげられ一沼津べづんど五俣殿八わと
のけよそうどこけぬれゞ陽殿の人くをてわげやくゝやう沼津殿。
今日のれお撰とゝ見ちんとつゝしちゝ見べーゝがゝ八やまぞりちう見方
して沼津殿とふお撰の二手組りる梶お撰と見そおちうぞのく
ゆんとのこゝず殿てたち源宮の用をさせれけ。

中巻

一合ハ矢先よ命のつゝちう

付タリ　去ぬ乃　強ふ八分別袋

大見八懐八将人の祈よなつて大場の物あの中よまゝれ保東親
子と祈ゝとゝへゝどゝ。ゝき薄かれバゝや振たとうけわけ先ゝれ
伯拡親ちやゝゝゆりたとれちうんゝぞゝちり和の案内をちつゝ者の
細指推まハ通ちを見ゝとゝをわけて赤沢山氏禁八懐山の
ちハ尾湾よ引いて推木三本楠よ立て鋒矢つゝひ今やくゝ伯
取よ大庭の手をを始海を石ゝ尾将俣助ちんどゝちゝて
とゝちを成りゝて〳〵次て伯取よ沼津三郎祐泰将ゝ来ゝ竹を
くゝり山をハ羽つけち麻矢と負ハ強者のちハ宿結をちうるの
ちくたゝまゝゝたゝ手のり為ゝ為ハ和ゝて我とれゝゝ者の
あゝゝを安居ゝハ指対て沼ゝ改せゝハ方ゝ員てゝゝりゝやゝゝさ
ゝの服よさんゝてゝ射てゝくさん亀矢大見八懐本法ち

ひてぞとて相撲をとるに、たゞの方の松法にて、紀平冠ひこして射
ぬらるゝ。猶の亡魂眼とゝいふは、をとゝさわらびと。やをとこなる
高生めとちと矢とりてつゞけて、をとゝ。たゞの方よりいくへ大見八郎、充義
一と拔びたの後矢をぐたりて丁どとりり。じぶんやはいたゞの
方へ向とりけど。たの化生よりくんをつけてゐるれば敵の矢つが
たゞすまつ呂中をいるこへひ神んやくたをんくしわくうち矢所
つゞんとをくれども雅義の痛をゐれば氣力たくて、矢逆ぞりち
たりけり。郎等たゞ鷲をとりて敵をたつゝ。深山松柏ぞう
てんへぞればかるく走りぬいて。そ氣力をひくれたゞ蓋とも
みりけりゐぞよ。蓋一人弦へつけたゝいて父の祐親よかく
へば大きよおどろき。古肥三浦をろをとるを一さんよりけ。祐
泰の伏をう西へまいて。急ぎるしんでぞりりゐ大事ゐくと

ちひくれどとうに若ぞまべ。郎等をま移さ伊丹のうぞで敵
ハ大勝の面神ハ。をゝぞうと。源乃中に弱くれいわうひいとるまでさ
猟乃西ゐ。ゐとしゃ。ハ伊の推の本法ち矢乃ありて。ぐ移よ
とゝりのことゐいて。性よ伊者れるぞとゐ。伊東の見
をゐまゐとをゐて。ぞうに。ゐ祀もわるゝ。たゞ法よ帰てゐうれる祐
よかくていゐ始とひまで。古把三浦んをつけ。祐泰をトんたてゐさ
ぞうをちゐ。ふ出を下いて。伊東ゐ敵へ遣りゐ。書ゐ春屋強兜
さゐぞ。ぞはまゞ青鶴とるに。源平にゐりいまいくんへ。時祐泰郎
をひくこ。敵ハ工夜祐泰ゐ。我を射ゐるをものハ。若をもゐに
母を源つゐ兄弟。小友ちこ弟をこ。高ゐしまれのやいだゐぞ。ぞう
らをゐれるものハ。夜ゐ拔ゐりゐまりゐ。ゐる強ゐ命をいるもの。ゐくゐ
ゐるゐまべゐをて因ゐをて女人のくゐをゐくゐをものをゐゐゆべ。且又書女いゐ

かゝぬ身にて。此月が満り月とおもハゆきハ男子ならバ此家をつがし。我
母ゆへにて村しろせし。桃の契りをわすべし。ちと女くハ卯の女子の
行末に父かろ遊ぶ。おそれんおりに斗ハて是を年すて事なけれ。さらばと父
妻子かりにつて父伊東庄老て成人の子をしさこそなまひ。さぞ叫
くうれ。ぞめさん。是を臨終の詞として。むなしく成ぬ。歳三十三を一
期として。つひに事きれ。色もりぬ。伊東夫婦へ其亡をあつかりぬ。書写子を
一家中。挑き捨男女を。日頃の慈悲のあつく。情の深かれ
べし度の此代をこそ。ねがひしに。然が神の擁護もなかりけるや。そだ荒れ
ころび天に叫び地に伏て。ぞろみかる。梅を河津三郎に三人の子有。嫡
八十余よ及ぶが。相模国の住人二宮の太郎朝忠に嫁せんとり結て
縁約せし。二ハ一満丸とて五つになる。末ハ箱王丸とて三つになりけるが母
うかし。そのあまりに二人の子共を袖にすがりつく。いとあはれハ涙をさそふ

とうとくこうけ。第十三十六中とかくべ。釈の敵を討て母ゝ妻ゝ家の
弦勝の河津友元のゝとそれがもとんゝといひれば二人の弟八幡宮詣を
ゝすんどだで母のなげきをそてふんもとかみくるぷくゝ家ゝ
にたがくてさに月とわてらとぬわりたまかりくて黄泉冥途の
旅ぬぷよつ人ゝ下方氏ゝ知と雅うでする人るれば。しらんかげき
てもつゝぬたて孝道の俤式もこかい仏絶偽とゝけ。千
八日とうれば伊東の弘親河津ゝ付先丑
寅つと勝ゝ出首とゝ孫ゝ。おまりのにくさゝ主ゝとかゝ。
獄門の本ゝけゝ。世ぷ祐清取りて。ゝかい首でゝ
ゝけ玉中の人ゝとかぷ友ゝ高知八我仕業わゝれぬとぷまとたち
ゝぷ眼おゝ兄ゝの敵とつぐすにいへぷまゝすて打ゝ。母ゝ斬罷
の家ゝ御密御べゝとけゝ。祐親ゝ知ゝたりゝ。ゝぷゝ彼ゝめ

と使ひ玉中とゝかゝつてゝ八ゝゝ付ゝて河津ゝ亡魂とゝぐゝゝて
ゝとゝとゝとゝ。ゝ。ゝ。

仕おん人をあつめて紙をとりて送りつしのがとべーと騒ぎいろ。為次ら怪び
ちごんの長おうちを入て下郎をよかり出給の元ちる市町を通ろ。
牛頭天王の名井のおうじぐちをとりまきてわやとあるこのわりしを。
わんをやりこれんをかくし入てあるあるとべ為次ら宛ちをくとしたすは。
堅法をとりくるとまきを他人龍女の弟をそろこて彼おうと。を敵をれ
為ちりいわをの事切出べよりとうひろへーくて侍ろくくと者て。行者
をかく大見八ろを生捕ぬ。為次怪びうめ八見行法をとりあるを生
出て射ろせ。ぞすつをぐうドせとあるべ人ぐーをを新とて。敵こハ
ゆーを町人ぐで反抗へ者ろの裏加なを事をけろべを。宮ろ人のつひ
わやまりをて出ーと徐どれば為ろ為おの蓋を出ろりげておどり
おぐーやあ人法ぐ為ん人すを怒ちらを。行の怪ゆをちろ我をこぐく。
雑義をけりろで。為絶どあるたのまを京都ちりつけりろひ怪を集

白状をろといちんをてをろいあるまでをとを為ひをを出べ為人を出ろ河をく
をうろをのをろりけ。為法あんをとりを引をを呼をよりを。為親を
くをとをへばをくくをを仕をろをのをを。為人をを国境をををりつけをりげをを
て大見八ろを科をおををいを為法ろよハ為ろたのまをーをとをるりひをけ
ろをりい。殊を女人を所人ぐをすを上ハをろを科をーを。一命をたをけ為
命ををを也て。行法を追いをろひをを。為法ぐ為おの歌ををりぬを怪
をり。為絶ハをりををりをりをれ指ーぐ大見八ろを科をおををるを為ぬを為
ろををびをハ出為りをすをるをりをべりをずを。為をををををれをををんをを
ハ逃のをりぬ

二之巻終